

JAM BAL JAN JAN バイレット「無重力ドライブ〜RacerX〜」(2008年9月) Photo©松本謙一郎

しかし、劇場が真に地域密着となれるか、玉山さんは懐疑的な見方を示す。
「江戸期、町々に劇場があったのは、移動手段が徒歩に限られていた当時はエンターテインメント拠点として劇場が徒歩圏内にある必要がある

上質な上演プログラムをそろえる

劇場運営を一手に任されている玉山さんは、通算で二〇〇〇〜三〇〇〇本、年間では二〇〇本もの演劇を観る、根っからの演劇人。「東京でおもしろい芝居を観るなら王子小劇場、と言われたい」と心意気を語る。
王子小劇場の特徴は、劇場を造る目的で設計され、地下を造ったことだ。それは当然と思われがちだが、東京にある小規模劇場は雑居ビル

「一九九八年に佐藤電機が本社ビルを建て替える際、現社長のお子さんが大学で映画をやっていたので、知り合いの演劇関係者から「都内には劇場が少ない」と聞いていたそうです。それで、せつくビルを建て替えるのだから、地下を倉庫にするくらいだったら劇場にしよう……と話が進みました」
佐藤電機の創業者である故・佐藤佐吉氏は、自宅に柔道場を開いて弟子を集め、柔道の稽古をつけていたという。篤志で地元のために文化・スポーツに貢献する意気は、創業者譲り。こうして一一年前に劇場オープン、玉山さんが代表に就いた。

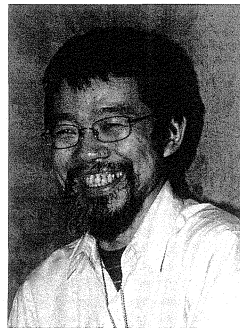
を改装したものが多く、舞台・客席の広さや高さ、遮音などに難があることもあるのが実情だ。
「王子小劇場は狭いながらも(劇場)なんです。ホールには十分な高さが確保でき、劇場に向かう階段もロビーも楽屋もきちんとある。客席数一〇〇程度の劇場では、あまりできないことではないでしょうか」
決して大きい劇場ではない。年間約四五演目を上演し、満員に近い観客を集めても、経営が楽な状況とは言えないという。
その中で、王子小劇場は「明日の演劇を少しよくするために、未来の演劇を豊かにするため



おもしろい芝居で、日本中の観客を王子へ

佐藤電機株式会社
王子小劇場

(東京・北区、たたかう劇場賞受賞)



玉山 悟さん
(王子小劇場代表)

「マーケットは「日本」」
王子界限は高齢者も多く、「演劇って何やっているの？」という人も。そこで地元の有名落語家・瀧川鯉昇さんを招いての落語会や、北区のコミュニティ・インターネットラジオに劇場の番組を持つなど、地元へのアプローチを積極的に始める。
さらに野心的な取組が、この四月から始まる。上演予定の劇団に対し、公演前に制作資金(上限一〇万円)を貸与するもの。演劇版の奨学金とも言えるこの制度、「公演直前には多くの劇団が当面のお金に困るはず。それを助けた」との思いでスタートする。

ったからなんです。それに対し、情報と交通が発達した都市では、劇場が地域に密着することは不可能だと思っています。自分が観たいものをやっている場所に行くのであって、すぐ近くで何をやっているかは、実はあまり重要ではないと思うんです。

昔、王子小劇場では畑澤聖悟さんという新進作家の作品を三本連続上演する企画で、「三本見られる共通チケット」を販売しましたが、その申込第一号は大阪の方、その次は新潟の方でした。おもしろいプログラムをやりさえすれば、マーケットは「日本」……と考えています

地域の文化拠点として演劇が大きな役割を果たしていくためには、文化行政と劇場を連携し、活力を生んでいくことが大切。玉山さんはこれまでの経験から、ある(限界外)を指摘する。
「行政の人とは仕事のサイクルが合わないんです。うちでは一年先まで予定が決まっているのですが、行政の人は年度単位で計画が決まらないと動けない。また、担当の方がコロナ禍替わってしまうのも問題。かつて行政と共同して演劇祭を立ち上げようと構想したこともありましたが、結局止めませんでしたね」

中・高生に今の演劇を

読者の方は、現在の小劇場演劇をどれほどご存知だろうか。TV等で活躍する役者が多数輩出されるようになった現在でも、小劇場演劇は常に動き、新しいものを提供し続ける。玉山さんに現在の趨勢を聞いた。

「そもそも小劇場演劇というのは(否定)から入っているんですね。歌舞伎・新劇・アンゲラ・第三世代……過去のものを否定して変わってきました。ですから「日本の演劇はこれ!」と呼べるものがない。
その後平田オリザさんが「静かな演劇」を提唱し、今はそのさらに後、「静かな演劇」を否定する動きが広がっているようです。岡田利規さんなどを中心に、より喋り言葉に近付こう・リアルを錯覚させようという流れでしょうか」
そうした(今の演劇)を広めるために――。
王子小劇場の今後を玉山さんにかがったところ、「中学生・高校生に向けてのアピールのための展開を考えたい」とのこと、現在アイデアを練っているそうだ。
「学校で観せられた学校演劇がつまらないものだ、その子は演劇をもう観なくなってしまう。それを止めるために、演劇の側も何とかしなければいけません。中学生・高校生が気軽に演劇に触れ、大学生や大人になるまで親しんでくれる仕組みを作りたいですね」

王子小劇場

東京都北区王子 1-14-4
地下1F
http://www.en-geki.com/

*1 畑澤聖悟 劇作家・演出家。横濱を拠点とするユニット・チェルフィッシュを主宰。2004年に「三月の5日間」で岸田國士戯曲賞を受賞。リアルな現代描写・日本語表現とともに、ダンスに通じる身体表現にも注目が集まっている。
取材/松久保大作(編集部)

*2 岡田利規 劇作家・演出家。横浜を拠点とするユニット・チェルフィッシュを主宰。2004年に「三月の5日間」で岸田國士戯曲賞を受賞。リアルな現代描写・日本語表現とともに、ダンスに通じる身体表現にも注目が集まっている。
取材/松久保大作(編集部)